

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2172101368		
法人名	社会福祉法人 新生会		
事業所名	サンビレッジ大垣 グループホームさくら・さくら		
所在地	岐阜県大垣市北方町5丁目35番地		
自己評価作成日	2019年10月1日	評価結果市町村受理日	2019年12月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.nhl.w.go.jp/21/index.php?act=on_kouhou_detai_022_kani=true&j_gyosyoCd=2172101368-00&servi_cd=320&type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市伝馬町110番地		
訪問調査日	2019年11月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ひとり一人の生活習慣を大切に、それぞれの個性、強みを活かし、それぞれが自分らしい生活が出来るように支援している。併設の特養、ディサービスとの自由に行き来が出来、一日2回のレクリエーションを一緒に活動を通じて社会性の維持が実現できている。グループホームの中でも団欒、活動の場を使い分け、それぞれの相性や強みを考慮し活動がより活発に行えるように支援している。暮らしの中での小さな喜びを利用者、職員、ボランティアと共有し生き活きと生活が出来るように支援している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

利用者一人ひとりの価値観や生活習慣を尊重し、「他人の痛みを自分のこととして感ずる感性…」の理念に基づくケアを実践している。職員、利用者と住民が「出あい、触れあい、響きあい」の気持ちで、併設する他事業所の利用者、多様なボランティア、幼児から大学生達と日常的に交流している。併設する事業所とは廊下でつながり、自由に行き来し、行事やレクリエーションは共有のスペースで一緒に参加している。介護相談員や外部サービス向上委員が定期的に訪れ、外部からの意見も前向きに受け入れている。職員に対しては、法人内でストレスチェックし部署毎に集計し健康管理に配慮しつつ、研修で自己啓発できる仕組みがある。職員の得意分野を活かして業務分担し、常に学び合い質の向上を目指している事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	部門会議において理念を踏まえた事業計画を立案している。GH内に掲示し異動職員、新入職員にもその意味、想いを伝えている。お互いを繋ぐ関わりを持ち互いに尊重できる様心がけている。	「他人の痛みを自分のこととして…」の理念をマニュアルとして所持し、日々のケアで実践している。職員個々が年度目標を立て自己評価で振り返っているが、話し合いができていない。	利用者それぞれについての話し合いはしているが、ケアの根幹となる理念について職員で話し合いの機会を作り、更なる理解を深める工夫が望まれる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	多種多様なボランティアとの交流、地域の中学生による交流会、体育祭へも見学に出掛けている。毎年恒例の中川さくら祭の参加、地域への外出や外食、つつみのコーヒーサロンで喫茶を楽しんでいる。地域住民向けの健康教室にも参加し繋がりが強まっている。	幼稚園児から小中高大学生から専門学校生まで多様な年代の児童生徒の訪問があり、ボランティアや住民との交流が日常的にある。併設している施設で利用者と行き来が頻繁にある。「さくら祭」では多くの住民と触れ合っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎月、地域住民向けに健康教室を開催している。認知症疾患医療センターによる認知症予防や補聴器等の講義、警察署のオレオレ詐欺防止の話題等もあり、地域住民の知りたい情報を発信できるよう内容を決めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回、運営推進会議を開催している。家族、自治会長、協力医、地域包括等が参加。運営状況の報告や、その時々々の旬の話題を出しながら、サービス向上のために率直な意見交換を行っている。	色々な意見を得る為に、多くの識見者に参加してもらっている。行事と合わせたり開催時間をずらしたりして、家族やメンバーが参加しやすくしている。会議記録は事業報告や予告事案のみで会議での意見が記録されていない。	率直な提案や要望、貴重な意見が出て、意見交換していることを、議事録に記し取り組みの開示が望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	月1回大垣市派遣相談員が訪問し、その都度施設でのケアや環境について気づきがあった事や利用者からの相談について報告を受け、検討し改善している。また介護相談員派遣事業交流会に参加し他事業所や相談員との意見交換会を年1回行っている。	介護保険の改正や制度上の問題点は、法人にて対処している。市の主催する会議に出席し、事業所の実情を話しながら情報交換している。介護相談員を受け入れ、多世代交流事業を受けて協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	マニュアルに沿って、会議等で勉強会を開催グループワークを行い、現場の中で学び合っている。日中玄関は全て解放しており、利用者は自由に入出りが出来る。ベッド柵、車椅子においてもマニュアルがある。職員研修で障がい者体験を実施し、実体験する事で人の『痛み』を理解するよう努めている。	職員が居所を確認することで、併設する施設も含め全館施錠せず、自由に移動できるようにしている。身体拘束廃止に関する指針を定め、委員会を毎月行い全体会議にて職員に周知し、研修は年2回実施している。言葉遣いについてもチェックシートで確認し、拘束しないケアを行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入社の段階で研修を受け、会議等で勉強会を実施しグループワークにより多方面から考え意識向上を図っている。ケアの中で身体的虐待、心理的虐待等が起こらないよう、声掛け、態度に留意している。気が付いた時にお互いに声を掛け合いながら、虐待防止に努めている。		

サンビレッジ大垣 グループホームさくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部の研修で学ぶ機会がある。実際に一人が成年後見制度を利用している。 『高齢者の尊厳の保持』の視点で権利擁護推進員養成研修の受け入れを行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には本人、家族が理解・納得が出来るまで都度確認を行い説明をしている。改定時には案内文書を発送し、面会時には声を掛け不明点がないか確認している。GH職員だけでなくすべての職員が普段から関係作りに努めており相談し易い環境を整えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	サービス向上委員会を設置。外部サービス向上委員の訪問があり、利用者が思いを聞いてもらえる機会がある。家族面会時には利用者のGHでの様子を伝え、家族の思いに耳を傾け、不安に思っている事や意見、要望を話せるような関係づくりに努めている。	介護相談員は毎月、外部サービス向上委員は年3・4回訪問し、利用者や家族の意見を聞いている。家族には面会時に本人の近況を知らせ、職員が1対1で意見を聞いている。居室への家具設置や誕生会実施の希望を聞いている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日常の会話の中や、年度末の自己評価シートを基に面談を行い、意見や提案を聞き業務やケアに反映させている。他部門の上司や仲間にも相談できる環境があり、相談しやすい相手に話ができるようになっている。	法人内の他部署との訪問交流での学びや喋る会で相談できる機会があり、管理者とも言いやすい関係がある。職員の家庭事情や体調にも配慮し、勤務の希望に対処している。プランターでの花栽培の意見を取り入れた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	自己評価シートを年度末に記入し、要望や希望を出すことができる。それらを基に面談を行い働く条件や希望を聞きそれぞれが働きやすい環境を整備している。永年勤続表彰を5年毎に行い、本人の喜びや、やりがいに繋げている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月の会議で勉強会を開催している。他施設研修、他部署研修、経験に応じたスキルアップ研修等を行っている。市や県の研修や勉強会へもそれぞれの業務に役立てるべく参加を促している。新入職員にはエルダー制度を導入しOJTにより育成している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今までは2ヶ月～3か月に1回程度、市内のGH・小規模多機能事業所のケアマネが集まり、情報交換をする機会があったが、人員の問題で機会が無くなった。 今は同法人内のGH・小規模多機能事業所をお互いに訪問しケアの質の向上に活かしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所カンファレンスに本人が参加し職員との顔合わせを行っている。入所当初の不安には時間を十分に取りゆっくりと関わり、早い段階で信頼関係を構築し不安や不便に対応し希望を話せるよう関係作りに努めている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ケアマネや他事業所等と連携を密に行い、家族の思いや不安な部分を聴きながら、入所の準備を一緒に行っている。話し易い関係を構築し、家族も安心してサービスが利用できるようにサポートしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	併設しているデイ、SSを利用してもらい、他利用者やデイ、SSの職員と馴染みの関係を構築し、リロケーションダメージの軽減を図るよう努めている。慣れ親しんだ場所で暮らしていく事ができるようにサポートしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一人ひとりの出来る事や相性をアセスメントし、共同作業による関係作りをしている。それぞれの経験を活かした活動を取り入れ、誇りを持って暮らせるように支援している。日々の話題を語り、感情を共有、人生の先輩として学ぶ事が多く相談にも乗ってもらいお互いを尊重している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の声、本人の言動と希望を大切にしながら関わっている。行事等は家族も参加し、共に過ごす時間を大切にしている。家族の思いに耳を傾け、本人への理解、認知症への理解をしてもらう事で、共に支え合えるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	正月に親族の集まりへ行く、遠方の親戚の訪問や初曾孫の訪問等がある。人との繋がりを把握して、在宅時の暮らしを断ち切らない様に、家族の協力を得ながら支援している。デイや特養の馴染みの利用者との関係が継続できるように支援している。	施設内の他事業所で昔からの馴染みの人と一緒に過ごしたり、喫茶サロンやさくら祭で馴染みの人と出会い会話を楽しんだりしている。親族や友人が来訪時には、再来訪をお願いしている。家族の協力を得ての帰宅、墓参や外食等で関係が途切れないようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の相性や強みの把握をしている。女性同士で性格の相違によりぶつかり合う事もあるが、職員が間に入る事で程良い距離を取ってもらい、様々な家事作業を助け合いながら行える様に努めている。居室にこもりがちにならない様に声を掛けている。		

サンビレッジ大垣 グループホームさくら・さくら

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他界後、物故者慰霊祭等を通して、その方の人生を共に振り返り、家族の思いを聴く機会を設けている。退所者家族に、中川さくら祭等の行事案内を行い、関係が切れないように努めている。その後ボランティアとして活躍されている家族もみえた。	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりが思いを話せる関係を築き、価値観を読み取り尊重し支援している。常に、誰のため、何のためかを考え支援している。日常の言動を観察し状態把握、情報共有を行い、ケアプラン立案時に、本人と家族から希望や要望を聞き取り入れている。	日々の何気ない会話や独り言を聞き逃さず記録し、思いの把握に努めている。夜間の居室、散歩時や入浴時にも聞いている。困難な人には、選択肢で言いやすしたり家族から聞いたりして把握している。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日々の暮らしの中で折に触れ話題を提供し、話を引き出し、生活歴や生活背景を把握している。面会時に家族からも情報をもらっている。また、馴染みの家具を使用し、家具の配置を出来る限り自宅と同じ様に配置する、デイ、SSでの馴染みの利用者や過ごす場所を提供する等本人にとって過ごしやすい環境に近づけるよう、家族と本人と一緒に考えている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	休養と活動のパターンを把握し、本来の暮らし方を損なわないように努めている。その日の暮らし方は、自己選択、自己決定してもらえるように、個別の声掛けをしている。日頃から、“いつもと違う”という変化に気付けるようにしている。	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の日常の行動と会話、家族の要望を取り入れケアプランを作成し、必要に応じ、医師、看護師、作業療法士、言語聴覚士の参加のもと担当者会議を開催している。毎月の部署会議でモニタリングを行い、意見を出し合い多方面から考えられるように努めている。	本人や家族の意向を聞き、特に入居時は、多職職の意見を入れて介護計画を作成している。毎月全職員で気づきを共有しながらモニタリングし、必要時は見直している。総括表は目標達成度、本人や家族の満足度も記録している。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	状態変化に応じて随時ひもときシートやセンター方式を活用し、統一した支援をしている。言葉や行動の変化については、考えられる根拠に基づき、プランに活かせるように記録している。実際のケアの根拠をSOAPで発信し職員間で検討を重ね状態に即したケアの実践に繋げている。	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	在宅生活が継続出来る様、短期利用を行っている。状況に応じて同行サービスも行っている。入居者や地域住民、家族等、誰でも参加できる健康教室の開催。小学生対象にキッズセミナーを開催し、今後の福祉の担い手を育てるために取り組んでいる。	

サンビレッジ大垣 グループホームさくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コーヒーサロンやボランティアの訪問で地域住民と関われるよう支援している。地域の小学校、中学校、大学生と交流、地域住民の畑に芋堀に行く等、暮らしを楽しむことができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現在も3名が在宅時からのかかりつけ医を利用、うち1名は重度化に伴い往診を依頼し職員による状態の報告を行っている。看取りの時もかかりつけ医に往診を依頼している。その都度、本人、家族の意向を確認しながら受診、往診の支援を図っている。	本人と家族の意向でかかりつけ医を継続し、家族が同行受診している。家族に書面又は口頭にて説明し受診後に報告を受け、時には電話で確認し連携している。歯科医や皮膚科医の訪問診療を受けている人もいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	疾患の事でわからない事や観察する事等、看護師に相談できる環境がある。看護師、介護職員と利用者の情報の共有を行い介護職員への指示や家族連絡等を行っており連携をとる事が出来ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は本人の情報提供を行い、滞りのない医療が受けられるように対応している。入院中は看護師、介護職員が訪問し、状態の把握を行い、電話での情報共有も図っている。早期退院へ向けて家族を交え話し合いを実施している。退院カンファレンスに参加し退院後の適切なケアに繋がっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期における本人、家族の意向は契約及び入所時に話し合いを実施し事前指定書を作成している。状態変化に応じ、カンファレンスを開き家族の迷いや不安、悩みに対応している。終末期においては医師・看護師等の各専門職も交えカンファレンスを行い、事前指定書をもとに本人及び家族の思いを確認し支援している。	入居時に本人や家族の意向を確認し事前指定書を作成している。食べられなくなった時点で家族、職員及び医師で話し合っている。カンファレンスで方針を共有し、看取りプランを立てて支援している。家族の宿泊希望に応じ、看取り後は他の利用者と一緒に見送っている。法人で家族を迎え供養している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応マニュアルが作成されており、急変時の対応ができるように会議等で確認し合っている。月に1回介護職員と看護師で各利用者の緊急時対応の確認・見直しを実施。看護師が外部の研修で学んだ事は会議の勉強会にて介護職員に伝えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、家族、地域、消防署員等と協働して防災訓練を実施している。夜間想定や引きずり搬送等、定期訓練を実施し、緊急時に対応できるか、一人ずつ動きの確認をし、迅速に対応できるように努めている。振り返りにて改善策を検討しより安全な避難方法を検討している。	水害・火災訓練や夜間想定をした訓練を年3回実施し、反省点を話し合っている。地域の福祉避難所の指定を受け、食料、レスキューシート、簡易トイレや日用品等を備蓄している。職員の緊急連絡はラインにて一斉送信できるようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の言葉、生活背景を大切に、本人に合った暮らしの援助や声掛けを行っている。関わる時には、挨拶、目線を合わせる、依頼形の言葉使い、声の大きさやトーン等、一人ひとりの個性を尊重した言葉掛けを行っている。	居室入口に表札は掲げず、のれんを掛けたり小物で飾ったりして分かりやすくしている。接遇チェックシートでの確認や接遇勉強会にて、自尊心を損ねない言葉遣いに気をつけている。写真の掲示は同意を得ている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望が話せるように、本人に分かり易い言葉で伝えるように心掛け、何気ない言葉も聞き逃さないようにしている。選択肢を提示し自己選択、自己決定できるように配慮している。行事計画も利用者の意見を聞き行先や内容等を決定している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	今までの生活習慣を継続できるように、自由に散歩したり、居室で過ごしたり、参加したいレクがある利用者には継続して参加できるよう声掛けをしている。その日の体調や気分に合わせて暮らせるように支援している。本人の自己決定に委ねている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外出時に一緒に服を選び、出掛ける前の楽しい雰囲気作りを行っている。衣類や靴の汚れに配慮し、身だしなみを整えるようにしている。その人の納得のいく声掛けをすることで、季節に合わない服装の場合、本人の尊厳を損なわないように着替えてもらうなどしている。定期的な毛染めやカットを希望により予約している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	新聞広告を活用し、どんな料理が好きか等話題を作り、冷蔵庫の食材を選び一緒に献立を考え調理をしている。食べたい物や作りたい物を探ね、旬の食材を使い、食にまつわる思い出話を楽しんでいる。片付けは利用者同士で行える様に見守りと声掛けを行っている。	朝夕食は利用者と広告やパンフレットを見て、献立の希望を聞き、宅配業者の食材を利用している。厨房から届く昼食は行事食、誕生膳や選択食がある。下拵え、盛り付けや配膳等のできる事を利用者が行い、食事時は職員も側に座り会話しながら楽しい雰囲気になっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	いつでも水分が摂れるように準備し、水分量が少ない方にはこまめに声を掛け、すすまない時にはゼリーを作って提供している。嚥下や普通食の摂取が困難な利用者にはやわらか食を提供し栄養の確保が出来る。常に管理栄養士に相談できる体制が整っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に声掛けを行い口腔ケアを行っている。磨き残しがある方には介入し磨き直しをしている。義歯洗浄に抵抗のある方には介入の時間や方法を変える事で介入出来ている。歯科治療が必要な場合には家族に受診や往診を依頼して早期に治療するように努めている。		

サンビレッジ大垣 グループホームさくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄間隔や尿量の観察、及び言語的表現が困難な方の排泄のサインを見逃さないようにしている。羞恥心に配慮し、トイレ誘導時の声の掛け方や声の大きさに気を配っている。サポートが必要な所を見極め、できる所は本人の力を活かしている。	本人の習慣や排泄間隔に合わせて声かけし、介助し過ぎないようにしている。パッドの種類を検討したり、声かけのタイミングを職員で話し合ったりしている。紙パンツからパッドのみ、夜間声かけのみとなった人がいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食のフルーツヨーグルト、麦御飯、個別に冷たい牛乳、野菜ジュース、冷水等で腸の蠕動運動を促している。食物繊維や寒天等を提供し本人に合った便秘解消に努めている。レクや活動、体操に積極的に参加してもらい、活動量を増やしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は毎日可能である。本人の希望に添って入浴し、外出日は別日に対応している。個浴が困難な利用者は併設の特養でウィラー浴を行い入浴の機会を確保している。安全確保が出来る場合は就寝前の入浴を取り入れさっぱりと気持ちよく寝られるよう支援している。	毎日の入浴、夕食後の入浴や足浴等の希望に応じている。順番や湯温、入浴剤やシャンプー等も希望に合わせている。嫌がる人には時間をおき声かけの工夫をしている。ゆったりした時間で昔話や鼻歌を口ずさみ、時には眠ってしまう人もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間不眠時や疲労回復等、日中にベッドやソファでの休養を取り入れ、ソファの位置を配慮し本人の過ごしやすい環境を整えている。就寝前は団欒の時間を設けリラックスし安心して眠りにつけるよう支援している。週一回のシーツ交換、布団干しを行い気持ちよく休んで頂ける様に支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報を把握して看護師と情報共有、服薬マニュアルに沿って行っている。薬が変更した時は経過観察を行い、その結果を医師、看護師、家族に報告、相談し、利用者が心身良好に過ごせるように支援している。服薬チェック表による確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの強みを活かして、できる事ややりたい事を聞き支援をしている。飲食店で働いていた方に、食事作りや盛り付け、配膳を行ってもらい、得意分野での役割を担うことで、いきいきとした表情が見られる。お茶会でのお点前を手際よく行い職員に教える方もおられる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	家族と一緒に外出や外食、自宅の行事への参加は家族協力の基に行えている。行きたい所、行ってみたい所を利用者と一緒に決め、家族を巻き込んで計画を立て、バラ公園見学や紅葉ドライブ等を実施している。天気の良い日には近くの喫茶店に行き、社会との繋がりを持ち続けている。	敷地内の駐車場を散歩したり、喫茶サロンに出掛けたり、プランターに水やりしたりして外気に触れる機会をつくっている。バラ、菖蒲、紅葉狩り等の季節の花見物やドライブに出掛けている。家族の協力を得て、自宅、通院や外食に行く人もいる。	

サンビレッジ大垣 グループホームさくら・さくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物時や外出時に財布を持参してもらい、好きな物を購入してもらえるように支援している。鞆に財布を入れて持ち歩くことができる方には、鞆に財布を入れてもらい、そこから支払いをしてもらっている。欲しい物を決め自分で支払うという行為を継続出来る様サポートしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状や、その季節に合った題材で絵手紙を描き、家族や友人に出している。遠方の娘さんから定期的に電話があり、取り次いでいる。家族からの誕生日カード、年賀状、母の日の贈り物が届き、家族との繋がりを大切にしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔を第一に考えて環境を整え、リビングや食卓の採光は、状況に応じてカーテンやダウン灯を工夫し対応している。玄関や空間に季節の花や手作りのタペストリーを飾り話題にしている。ベランダにはプランターを置き、水やりをして花や野菜の成長を楽しんでいる。	居室が横並びでない設計で、一人になれる場所を作り、長椅子やソファに手作りの座布団を敷き、畳の部屋に仏画を飾っている。雑誌や新聞を読む、お経をあげる、縫い物をするなど自由に過ごせるようにしている。季節の花や盆栽、手作りの小物を飾り家庭的な雰囲気になっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士、家族や来客者が、リビングやプライマリー空間、居室、施設内、つつみといった自由な場所で気軽に過ごせるように配慮している。構造上死角の多い空間を作っており、プライベート空間を大切にし、思い思いの場所で過ごす事が出来るよう活用している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	在宅生活の継続が出来る様に家族へ説明し、協力のもと居室には使い慣れた家具、寝具、思い出の品物、作品等を置いて頂いている。畳を敷く等、慣れ親しんだ生活環境を整えることで、居心地よく過ごせるように努めている。	居室入口にのれんを掛けたり、小物を飾ったりしている。自宅で使い慣れた物を持ち込み、本人と相談しながら家具を配置している。家族と相談し季節の飾り物を変えたり、ベッドから屋外の景色を眺めやすくしたりしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりはトイレ、風呂場と階段の最低限となっており必要な場合は福祉用具を使用する事で、行動が制限されないようにしている。またキッチンカウンタやソファ等を置くことでつたっていききたいところへ移動ができるように工夫している。		